対話型鑑賞を通じた異文化交流の実践

遠藤 緑（Midori ENDO）・長岡 絵里佳（Erika NAGAOKA）
鳥取短期大学 国際文化交流学科

【目　的】

対話型鑑賞とは、1980 年代半ばにアメリカのニューヨーク近代美術館（MoMA）で開発されたアートの鑑賞法のひとつで、アートを通じて様々な力を育む教育プログラムとして学校や企業研修などに導入されている。国際文化交流学科では、令和元年度から鳥取県立博物館と連携し、聞く力や他者の視点を尊重する姿勢など、コミュニケーション力を高めるうえで重要な要素を養うために、対話型鑑賞を活用した教育を実践してきた。令和３年度には、一年次前期の授業で対話型鑑賞のポイントを学びクラスメイト同士でお互いにファシリテーションを実践した後、一年次後期に鳥取県立博物館に出かけて小学生と対話型鑑賞を行っている[1)]。こうした取り組みをさらに拡充し、令和４年度は一年次後期の必修科目「異文化交流」においても対話型鑑賞を新たに実施することになった。

対話型鑑賞は、対話による多様な表現や気づきを生み出す異文化理解や異文化交流の機会としても注目されている。そこで、「異文化交流」の授業に取り入れる際に、令和４年度の学科専門教育科目における授業実践に加え、正課外の活動として、学生の希望者を募り、鳥取県内の国際交流員等を対象とした英語による対話型鑑賞を試みる。それらの成果と課題を検証することによって、英語による鑑賞や異文化交流の方法とその効果、対話型鑑賞に関わる科目の連携のあり方などの教育改善を図りたい。

【活動（研究）の概要】

（１）英語による対話型鑑賞の導入の経緯

対話型鑑賞は、一つの作品を何人かで鑑賞し、発見したことや気づいたこと、感じたことなどを言葉にして対話しながら鑑賞を深めていく。鑑賞をする人は、作品をじっくりみる、対話をする、その対話をもとに考える、もう一度作品をみるというプロセスを繰り返す。そのプロセスにおいて、対話をスムーズに進めたり、言葉を共有しやすいように整理したりするのが対話型鑑賞のファシリテーターである。国際文化交流学科では、自分の考えを言葉にして表現すること、相手の考えをしっかりと聞き理解することといった基本的なコミュニケーションだけでなく、このファシリテーションの技術を学ぶ機会として対話型鑑賞を授業に導入している。

一年次後期の必修科目「異文化交流」では、例年、鳥取県交流推進課と連携し、JET プログラム（語学指導等を行う外国青年招致事業）の一環として外国語指導助手（ALT）等との交流実践を行ってきた。学生がグループにわかれ、伝統文化や県内の観光地を紹介してきたが、学生たちのプレゼンテーションが中心で相互交流があまり活発にならないという課題があった。

そこには主に次の２つの問題がある。まず、学生たちの英語力の問題である。近年、英語に苦手意識のある学生が目立つようになり、英語の授業をできるだけ履修しようとしない学生も多くなってきている。また、英語の読み書きはある程度できても、話す聞くことに自信がない学生も多い。英語を使うことが楽しいことであるという経験をしたり、自分が持つ英語の知識を最大限に使って相手とコミュニケーションをしたりする機会を提供することが必要である。次に、積極的に文化背景の異なる他者に関わろうという姿勢や相手から意見や考えを聞き出そうという姿勢が乏しいことも問題であっ

た。そこで、対話型鑑賞で培われる対話の力やファシリテーションの力が活用できるのではないか、また、英語での対話にチャレンジすることで語学の必要性に気づくのではないかと考えた。

英語で対話型鑑賞を行うには、ある程度の英語の知識が必要である。今回の活動では、英語で対話型鑑賞を行うことを学生たちに伝え、希望した学生のみ参加してもらった。そのため、ある程度英会話に自信のある学生や自分の英語力の向上に関心のある学生が参加することになった。また、今回希望を募った２年生と専攻科生はすでに日本語での対話型鑑賞を体験しているため、その体験を思い出してもらい、対話型鑑賞のプロセスやファシリテーションを理解したうえで参加してもらった。

対話型鑑賞の実施の前に、学生たちには次の質問を意識するように伝えた。

・発見したことや考えたことはありますか
・どこからそう思いましたか
・他に発見はありますか

また、英語の質問例として、“What is going on in this picture?”や“What more can you find?”などを伝え参考にしてもらった。

（2）英語による対話型鑑賞の実践

①6月14日（火）コレクション宅配便での実践

写真１　対話型鑑賞の様子

6月14日（火）昼休みに、国際文化交流学科２年生３名、専攻科生２名、英語の授業を担当する非常勤講師２名が集まり実施した（写真１）。

実施後学生に振り返りシートを配布し、感想・意見を記入してもらった。感想・意見は以下のとおり。

・英語で初めて対話型鑑賞をして、自分の感じたことを自分の語彙で伝えることができたので良かった。また、自分が気になったことを英語で質問することもできた。しかし、自分の深く感じたことを英語で伝えることはまだ難しかったので、英語力を上げることが大切だと思った。そして自分がファシリテーションをしたとき、英語の返答を聞くのに精一杯で会話を広げるのが難しかった。
・英語の対話型鑑賞をしてみて、難しかったのは自分から話すことです。意見を出すタイミングがつかみにくいこともありますが、英語で話そうとすると頭で組み立てることに時間がかかったり、合っているか不安になったりして積極的になれませんでした。
・私の第二言語は英語なので、自分の言いたかったことを日本語よりうまく伝えることができまし

た。英語で行う対話型鑑賞を初めて経験したので楽しかったです。
・英語で対話型鑑賞をすることで、日本語でするのとまた違った楽しさはありましたし、新鮮な感じでした。
・ただでさえ感想を伝えるのが大変なのに、英語で伝えるのはさらに難しかった。何回参加しても、一つの作品から色々なことを感じ取れて、他人の考えなども共有できて良い機会だった。

②11 月 15 日（火）コレクション宅配便での実践
11 月 15 日（火）昼休みに、国際文化交流学科２年生１名、専攻科生２名、英語の授業を担当する講師１名が集まり実施した。
さらに実施後の振り返りとして、参加した学生と教員とで意見交換を行った。以下は振り返りであげられた意見である。

［対話型鑑賞について］
・他者の意見を聞きながら鑑賞するのがおもしろい
・（他者の意見を聞いて）絵の見方が変わることがあった

［英語で対話型鑑賞を行うことについて］
・教科書でない（英語を使う）練習ができることや、（実際に）人と一緒に行うことができるのが良い
・日本語での表し方と英語での表現が変わると思う。そのため、どうやって言ったらいいか、表現したらいいかも変わる。言語のニュアンスの違い（が出ると思う）。
・英語でするのは難しい。英語が出てこないから。
・英語の方がリラックスして話せるから、楽にできる。普段母親とは英語で話しているので。

③2 月 15 日（水）授業「異文化交流」交流実践
2 月 15 日（水）授業「異文化交流」の交流実践の一部として、県内在住の外国人の方１名と国際文化交流学科２年生２名、専攻科生３名で実施した。
実施後、学生（①②ともに参加していた専攻科生２名）に実施について尋ねた。感想は以下のとおり。

・絵に何が描かれているか、描かれているものからどのように感じるかを、英語で意見を出すことができ良かった。
・すべて英語でやりとりしながら、笑いもたくさんある雰囲気だった。印象に残っているのは、「一つの絵なのに、同じ世界じゃないように見える」という意見。

前述のとおり、③について感想を尋ねた学生は、全３回の英語での対話型鑑賞に全て参加していた学生である。③の実施については、地域の観光地を紹介したり、ゲームをしたりといった交流実践の一部として対話型鑑賞を行ったため、前後の活動がアイスブレイクとなり、リラックスした雰囲気で行うことができた可能性もある。またこれまでのところで、英語で話すのは難しいと言っていた学生も、「英語で意見をだすことができた」と言っていることから、繰り返し実践の機会を持つことで、対話する力やその際に使う英語力が向上する可能性もあるのではないか。

【課　題】

英語での対話型鑑賞の実践をとおして、以下２点の課題が見つかった。
一つは英語力の課題である。今年度は学生の中に日本語を母語とせず、英語を頻繁に、あるいは日

常でも使用している学生が２名参加していた。彼らにとっては英語での対話型鑑賞は、日本語で行われるものよりも、自分の意見を伝えやすかったようである。しかし、その他の学生にとっては、英語で話すこと自体が難しく、語彙や言い回しが思い浮かばないために、自分の思いが伝えられなかったことも多かったことや、会話が続かなかったことが感想から分かった。そのため、英語で会話することに慣れていない学生は、円滑なファシリテーションのためには、対話型鑑賞のファシリテーターが使う質問や、アート鑑賞時によく使う語彙などをあらかじめ学び、練習しておく必要があるだろう。

だが同時に学生の振り返りからは、英語を話すことが難しくおぼつかないながらも、自分の感想や意見を伝えたかった、もっと質問をしてみたかったという思いがくみ取れた。このことから、英語力がそれほど高くはない英語学習者にとっても、英語での対話型鑑賞の機会は、対話をとおして話したい、伝えたいという英語学習のモチベーションに繋がると考える。さらに、自分の言いたいことが言語の問題で伝えられないという体験は、日本語母語話者ではない人が言語の面で日本社会で直面する困難さを体験することでもある。

二つ目の課題は、意見を伝えること、感じたことを言葉にすることの難しさである。対話型鑑賞はアートをとおして自分が作品から受ける印象や、見えるものを言葉にし、対話を重ねていく。今年度使用した作品は、一目では何が描かれているかわからないものや、様々な解釈ができそうな作品が多かった。そのため、自分にはこの作品はどう見えているのか、作品から何を感じているのかは、母語を使ってさえ曖昧で言葉にはしにくいものであったと推測する。作品を見る人の数だけ解釈の仕方があり、自分とは違う意見を聞くことで作品の見方が変わることもあるというのが対話型鑑賞の醍醐味であるが、対話を始めるためには言葉にする必要がある。学生の振り返りにもあるように、感想を伝えることに慣れていない学生にとっては、まず言葉にすることが難しく、英語ならなおさら難しいということを改めて認識した。しかし、対話型鑑賞の機会を複数もつことで、この鑑賞法に慣れ、人と対話し、自分とは違う意見を聞くことを楽しめるようになっている学生もいた。回数を重ねることで、言葉にしにくいことも伝える技術を獲得していくのではないかと考える。

以上のことから、英語による対話型鑑賞は一定の成果はあるものの、英語力などの基礎的な力が必要であることから必修の授業で取り入れることは困難だと判断するに至った。そのため、一年次後期の必修科目「異文化交流」で実施するのではなく、令和５年度入学生のカリキュラムで新たに設けた二年次選択科目「共生のためのプロジェクト演習 B」で取り組むことになった。今回の取り組みでわかった課題をもとに授業を計画し、学生たちが対話型鑑賞を楽しみながら英語力やコミュニケーション力を向上させることができるように引き続き検討していきたい。

《注・参考文献》

１）「鳥取県立博物館で『対話型鑑賞』のファシリテーションに挑戦しました」〈https://www.cygnus.ac.jp/inter/index.php?view=12397〉（2023 年 4 月 30 日閲覧）